

# 美術部へようこそ! 宮城県仙台二華中学校・高等学校

中高一貫校である、宮城県仙台二華中学校・高等学校。  
毎年、1年間の活動を振り返る展覧会を開催しています。その模様取材しました。

## 熱意あふれる展覧会

「無料の展覧会です、ぜひお立ち寄りください」。生徒たちの元気な呼び声に誘われて展示室に入ると、ずらりと並んだ力作に目を奪われる。これは、仙台二華中学校・高等学校の美術部が、市内にある公共施設「せんだいメディアテーク」で毎年、年度末に開催する「二つ展」という展覧会だ。一つ一つの作品に力があるのはもちろん、展示のしかたも実に工夫されている。

「美術部が1年間に制作した作品を時系列で展示しています。単調にならないよう色合いに気を配ったり、足を止めてもらえるようにレイアウトを工夫したりと、細かいところまでみんなで相談しながらつくりあげました。さらに今年は映像を流したり、書道部とコラボレーションした作品を展示したりと、新しいことにも挑戦しています」と話すのは高校2年生の部員Kさん。

確かに、展示室に入ってすぐのスペースでは映像作品が流されており、来場者の多くは、まずそこで足を止める。生徒たちが「黒板アート」を制作する過程を早回しするという映像なのだが、観た人から思わず「すごい……」という声もれるほどの力作。書道部との合作では、書いてほしい言葉を美術部が依頼し、その書を、美術部がレイアウトしてダイナミックな作品に仕上げた。

また、展示室を歩いていると、生徒たちが「この作品は……」と、にこやかに解説してくれるので、まったく飽きることがない。ついつい長居してしまう展覧会だ。来場者からは「中高生の作品とは思えないほど見応えがあった」「作品に圧倒された」「がんばってほしい。応援したい」などの感想が寄せられていた。

## 生徒たちを精一杯褒める

この「二つ展」の歴史は長い。同校が中高一貫校になったのは6年前だが、この展覧会は前身の宮城県第二女子高等学校の時代から始まり、40年以上の歴史をもつ。今より小規模で開催されていたそうだが、中高一貫校になったことを機に、中学生・高校生がいっしょに作品を展示する今のスタイルになった。

「私がこの学校に来たのは中高一貫になって2年目のときですが、当時は、部員が8名しかいませんでした。でも、このような展覧会を開催したり、文化祭などで普段の活動を外に向けて発信していったり、おもしろそうな生徒がいたら、私が直接スカウトしたりして(笑)、徐々に部員が増え、今では中学生が15名、高校生が25名にまでなりました」と話すのは顧問の鈴木雅之先生。部活動を盛り上げていくコツは? と尋ねると、「生徒たちを精一杯褒めることと、『こんなことをしてみたいんだけどなあ』と、ちょっとだけ『無

茶振り』をしてみることに」と笑った。

## 中高一貫校ならではのよさ

その先生の振りに応えるのが、高校生の部長のHさんと、中学生の部長のT君だ。「部員数が多く、みんなさまざまなアイデアを出し合えるのがいい。想像を上回る作品ができることが多いんです。また、こういう展覧会があると、みんなが一つになれる気がします」とHさん。「展覧会では、中学生の活動時間が限られているため、高校生が中心となって会場の設営をしてくれました。先輩の姿から学ぶことは多い」とT君。中学生は、設営に時間が割けなかったぶん、当日の受付や来場者の接客、ライブペインティングの準備などを精力的にこなしていた。部員たちは非常に仲がよく、みんなで意見を交わしながら展覧会を運営している姿を見ていると、上級生・下級生の区別はない。

「絵を描いたりする技能は高校生のほうが優れているかもしれませんが、発想については、中学生のほうがざらりと光るものをもっていたりする。年の離れた先輩・後輩と学び合えるのが中高一貫校のよさ。お互いを認め合って尊重できる仲間になりたい」と鈴木先生は言う。

展覧会場で、お互いに助け合いながら、きびきびと働く生徒たちの笑顔を見て、先生の思いは届いていると感じた。



放課後  
第9回  
ART



1/ 生徒たちは明るい声でお客さんを呼び込む。客足は途絶えず、いつもにぎやかだ。  
2/ 「黒板アート」の映像をじっと見つめる来場者たち。  
3/ 書道部とのコラボレーション作品は、会場の壁を使って大胆にレイアウト。  
4/ 「その色いいね」「ここはもっと重ねて塗ろう」。声をかけ合いながらライブペインティング。  
5/ 受付では、パンフレットの配布とポストカードの販売を行う。

# 教室を飛びだして

## おおだて 大館ふるさとキャリア教育

秋田県大館市の伝統工芸、大館曲げわっぱ。  
市内の子どもたちは、曲げわっぱの工房を訪れて制作体験をしたり、  
職人から直接話を聞いたり、さまざまな活動を通して、  
地元の伝統工芸に親しんでいます。その活動をご紹介します。

### 誇るべき工芸品

「大館曲げわっぱ」は、秋田県を代表する特産品の一つであり、経済産業大臣により伝統的工芸品に指定されている。その歴史をひも解くと、江戸時代にまでさかのぼる。関ヶ原の戦いに敗れ大館城主となった佐竹西家が、豊富な森林資源を利用し、武士に副業として奨励したのが始まりだ。困窮する領民には、年貢米の代わりに原木の運搬を命じたといわれる。

曲げわっぱは、天然秋田杉を薄く剥いて熱湯につけ、柔らかくなったから巻き込むように曲げて成形していく。木材の継ぎ目にとじ穴を空け、サクラの皮で縫い留める。均等な柱目を生かしたシンプルな美しさがあり、食器類に多用されている。秋田杉の吸湿性によってご飯がおいしく感じられ、弁当箱として愛用する人も多い。また、現在では、コーヒーカップや照明器具などさまざまなものにアレンジされて、制作されるようになった。

### ふるさとに根ざした教育

市では「ふるさとキャリア教育」  
(※)の一環として、子どもたちを対

象に、この歴史ある伝統工芸に親しんでもらうためのさまざまな取り組みをしている。

例えば、大館曲げわっぱ協同組合に協力を仰ぎ、各工房で、制作体験を実施している。子どもたちは、曲げわっぱが制作される現場を見学し、職人に教わりながら、杉の薄板を加工して制作する。実際の工房で「本物」に直接触れることで、地元の工芸品に対する関心を高め、地元への愛着や誇りを醸成することがねらわれた。

### 曲げわっぱの魅力を実感

また、市内の中学校では、美術科の授業で、この伝統工芸を取り上げることにも多い。

大館市立田代中学校では、曲げわっぱそのものをじっくり鑑賞した後、伝統工芸士の話や聞くという授業を行った。曲げわっぱを知っていても、実際に使ったことがない生徒は多い。そのため授業では、ご飯を入れて使ってみるという体験をさせ、素材のなめらかさや軽さ、温かみ、香りなどのよさを感じ取らせた。生徒たちには、「用の美」も体感させることができたようだ。

その後、伝統工芸士が制作実演を

行い、曲げわっぱの成り立ちや、デザインの工夫、形の美しさ、手づくりのよさなどを、職人の立場から語った。「曲げわっぱになじみがなかったが、よく知ることができて、今は身近に感じる」「歴史を感じた。大館の人たちが曲げわっぱを大切にしてきたんだと感じた」「自分用の欲しい！」といった感想が出され、生徒たちは地元の伝統工芸の美しさや価値を改めて感じるようになった。職人の技を間近で見ることができたのも、貴重な体験となったことだろう。

市をあげて、積極的に子どもたちへ地元産業の魅力や優れた特産物、伝統的工芸品、文化遺産を伝えていくことは、将来子どもたちが地域に根ざし、地域を支えていこうとする意欲につながる。曲げわっぱの制作体験を含めた「ふるさとキャリア教育」の取り組みを通して、活気あふれる地域の基盤が築かれつつある。

※ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」とその基盤の上に自らの人生の指針を描く「キャリア教育」を融合した大館市独自の教育理念。「ふるさとキャリア教育」については、下記のサイトで詳しく紹介されている。

大館ふるさとキャリア教育  
<http://www.city.odate.akita.jp/dcity/kyokenkyu/11-7371.html>



- 1/ 優れた吸湿性に加え、弁当箱自体が軽いため、持ち運びやすい。
- 2/ 伝統工芸士の技に見入る生徒たち。
- 3/ 曲げわっぱの制作工程を体験。職人に直接指導してもらう。
- 4/ 器を実際に使って、形の美しさ、素材の特徴などを感じ取る。
- 5/ 職人の工房の様子。実際に工房を訪ね、その現場を見ることで、曲げわっぱへの愛着がより深まる。



放課後  
ART